

5-2

新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校 における「読解力」向上の取り組み

新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校 研究主任 倉澤 秀典

1 当校の学力向上のビジョン

文部科学省は、変化の激しいこれからの社会を生きる子どもたちに必要な生きる力として、確かな学力、豊かな人間性、健康・体力をあげている。このうち、学力については「知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力等まで含めたもの」としている。そして具体的な学力として「知識・技能、学ぶ意欲、学び方、課題発見能力、思考力、判断力、表現力、問題解決能力」の8つをあげている。学力をより幅広く具体的に捉え、学習を通じて確かに生徒に定着させることが求められているのである。

当校では、学力を「基礎的・基本的な知識・技能、思考・表現・問題解決などの能力、学ぶ意欲」の総体と捉えている。そして、「生き方を求めて学ぶ生徒」を教育目標に掲げ、各教科や総合、道徳、

特活の中で、生徒が学力を確かに獲得し、生涯にわたって、より善い生活を求めて学び続けていく力をつけることができるよう、実践研究に取り組んできた。そこでは、「不思議だ、なぜだろう、明らかにしよう」といった生徒の学びに向かうエネルギーに着目し、生徒の主体的な学びを実現し、その過程で思考力や問題解決能力といった力を発揮し、学習内容である知識・技能を獲得することができるようにしてきた。その面で、当校の学力観は、学力を「学びの基礎力」「社会的実践力」「教科学力」の3つの面から捉えている「総合学力」の考え方と共通する点が多い。

そこで、当校では、これまでの教育活動の成果や課題を明らかにし、必要に応じて見直しを行うため、平成17年度、18年度と2ヵ年にわたり、「総合学力調査」を実施した。その結果、以下のことが明らかになった。

《平成17年度》4月25、26日実施（全学年5教科＋学習意識調査）

- ①各学年とも、各教科の学力は、目標値を上回っている。
- ②学びの基礎力は、概ね全国平均を上回っているが、「豊かな基礎体験」が相対的に低いレベルである。

《平成18年度》4月24、25日実施（1学年5教科＋学習意識調査、2学年学習意識調査）

- ①各教科の学力は、目標値を上回っている。
- ②学びの基礎力は、概ね全国平均を上回っているが、「学びに向かう力」「自己成長力」が相対的に低いレベルである。

この結果から、各教科の学力は概ね身に付いているが、学びの基礎力の中には、「豊かな基礎体験」「学びに向かう力」「自己成長力」等、相対的に見て低い項目があり、これまで以上に豊かな学びを、学習活動に位置付けていく必要があることがわかった。

また、他の調査・アンケート等からは、生徒・

保護者の要請として、基礎・基本の確かな定着があがった。

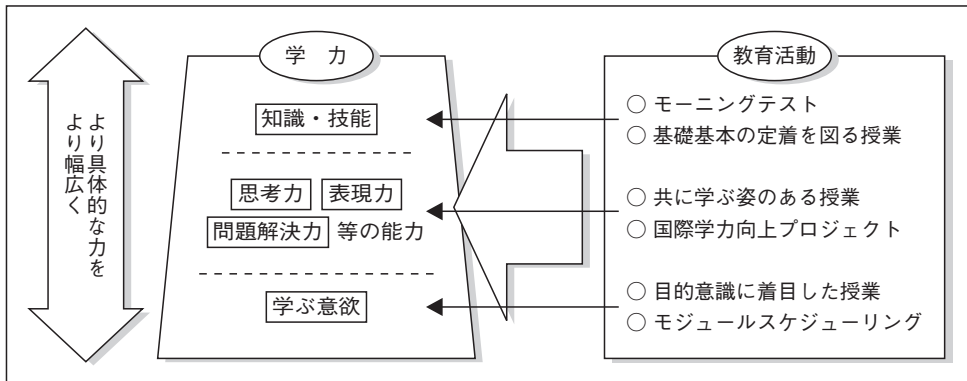
さらに、OECD各国のPISA調査の結果が公表され、マスコミ等で、日本の高校生の学力、特に「読解力」の低下が叫ばれるようになり、当校でも、「PISA型読解力」をどのように捉え、それをどのように生徒につけていくかが、職員間の問題となっ

た。

以上のことから、当校では平成17・18年度の2年間、生徒に、これまで以上に豊かで多様な学び

を保障し、幅広い学力を確かに定着させるため、以下の6つの教育活動を実践した。

- ①基本的な知識・技能の定着を図るための「モーニングテスト」
- ②基本的な知識・技能の獲得を図る「基礎・基本の確かな定着を図る授業」
- ③他者とのかかわりを通して学習内容への認識を深める「共に学ぶ姿のある授業」
- ④「PISA型読解力」の向上を目指す「国際学力向上プロジェクト」
- ⑤生徒の学ぶ意欲を大切に「目的意識に着目した授業」
- ⑥体験的・追究的活動により生徒の学ぶ意欲を高める「モジュールスケジューリング」



2 学力向上に向けた教職員・生徒・保護者の意識づくり

①で述べたような多様な教育活動を行うにあたり、教職員・生徒・保護者の意識づくりを、次のように行った。

①教職員・保護者に向けた研修会・講演会の実施

平成17年6月24日に、ベネッセ教育研究開発センター主任研究員の田中勇作氏を招き、当校教諭を対象に、当校の総合学力調査結果を基にした「豊かな学力形成を考える研修会」を実施した。また、翌25日には保護者対象の講演会「学力向上を考える講演会」も併せて開催した。これにより、職員間では、次のことが再認識された。

- 教科学力の向上のためには、学びの基礎力を高めることが必要であること
- 学びの基礎力を高めるには、多様な教育活動による豊かな学びが必要であること
- 学びの基礎力を高めるには、学校だけでなく保護者の協力も必要であること

そして、研修会や講演会の成果を、学年だより等で、生徒・保護者に知らせた(次頁資料参照)。

②教育界の動向についての情報の共有化

昨今は、教育に対する社会の関心が高く、本、雑誌、新聞等、様々なメディアで、様々な教育問題が論じられている。それらの最新情報をいち早くキャッチし、教職員同士での共有化を図った。

③教育活動の意図についての生徒・保護者への説明

多様な教育活動を行うにあたり、生徒に対し、私たちの学力観や社会の動向を踏まえて、教育活動の意図を説明し、定期的にアンケートを行った。これにより、生徒の学力向上に向けた意識づくりを行った。

また、保護者に対しても、学校だよりや学年だよりで、教育活動の意図について知らせたり、アンケートを実施したりした。さらに、通知表でも、それらの取り組みの成果がわかるようにした。

【講演会についての学年だより】

新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校
第2学年
学年だより
第12号
H17.6.28

緊急報告：「学力向上を考える講演会」開催

去る25日(土)に標題の講演会を本校主催で開催しました。この講演会は次のことをねらいで開催しました。

- 子どもたちの学力を高めるために、学校と保護者がともに協力して取り組んでいこう。
- そのために、次のことを確認する。
 - ① 学力とは何か、「総合学力」という学力のとらえ方。
 - ② 4月に行った「総合学力調査」の結果をもとにした、本校生徒の学力の現状。
 - ③ 教科学力を高める「学びの基礎力」と、学校教育と家庭教育の役割。

今回の講演会には、講師としてベネッセ教育研究開発センターの主任研究員の田中真作氏を招いて行いました。田中氏は本校が4月に実施した「総合学力調査」の作成に深く関わってきた方です。この講演会のために遠く岡山から来ていただいたことができました。

- 講演会を聴き取った保護者の方の感想の一部
- 具体的なデータに基づく新で斬新な見方、また、わかりやすかった。
 - 家庭で何をすればよいかの方針が見えた。

上の感想は保護者の方の感想の一部ですが、多くの方が同様の感想をもちたようです。当日の参加者は3学年合計で約15人の方でしたが、本日は全員の保護者の方にお聞きいただきました内容です。そこで今日この講演会をお知らせしようと思います。

- ① 学力とは何か、「総合学力」という学力のとらえ方
学力を次の3つによってとらえる。
 - 「教科学力」：国語や理科の教科について、①関心・意欲・態度、②知識・理解、③思考・判断、④技能・表現の4観点から、その到達度を測定する。
 - 「学びの基礎力」：①確かな基礎力、②学びに向かう力、③自ら学ぶ力、④学びを促す力の4つの観点から、学習意欲調査によって測定する。
 - 「生きる力」：①自己成長力、②問題解決力、③社会的実践力、④豊かな心の4つの観点から、学習意欲調査によって測定する。

これら3つの学力は互いに相関関係にあり、それらがバランスよく高まっていくことを「総合学力」が高まるととらえる。

- ② 本校生徒の学力の現状(2年生に焦点を当てて)
○ 「教科学力」について
調査実施時が4月であることから、中学1年の学習内容(国語社理英)について実施しました。

すべての教科のほとんどの領域で8割から9割の達成率(正解)、全国トップレベルの高スコアである。

- ・国語(達成率平均99.2) 英語(達成率平均99.2) 数学(達成率平均97.9)
- ・社会(達成率平均95.8) 理科(達成率平均97.5) この教科も(領域により多少の差違はありますが)目標額の1.5～2割の達成度に達しています。

○ 「学びの基礎力」を高める力について

・全国データと比較して、全体的に高バランスで良好である。
・「学びの基礎力」の中の、①確かな基礎力の高スコアが全国と比較して高い。ここが課題である。

- これは3学年とも同様の傾向にあった。
一般的に1年～2年～3年の順で、全体的にスコアが下がっていく傾向にあるが、本校は2年～1年～3年の順でスコアが下がっている。
※ただし、3年生のスコアの下がり具合も小範囲であり、3年生のスコア～そのものは全国データと比較しても高バランスで良好である。

- ③ 教科学力を高める「学びの基礎力」と、学校教育と家庭教育の役割
○ 「学びの基礎力」の高さが「教科学力」を左右している。
もう少し詳しく「学びの基礎力」とは何かを確認します。「学びの基礎力」は、次の4つの側面から構成されています。

- ① 豊かな基礎力：直感体験(自然体験、生活体験、文化体験、対人体験)、メディア体験(新聞、インターネット、読書、手紙)、人間関係(友人、家族との交流)、教師との信頼関係) 基本的な生活習慣(健全な食習慣、自律的行動、正しい生活リズム) が含まれる。
- ② 学びに向かう力：感じる力・学習動機・自己効力感・自己責任が育まれ、学びの原動力とらえられる。
- ③ 自ら学ぶ力：学習スキル、学習方法、学習計画力、自己学習習慣が育まれ、学ぶためのスキルや態度とらえられる。
- ④ 学びを促す力：学習継続力・学習のけじめ、学習環境整備・授業への関与が含まれ、学びにおける自己コントロールとらえられる。

これら4つの「学びの基礎力」はどれをとっても、教科学力と正の相関関係があります。つまり、4つの「学びの基礎力」が高いほど、平均して教科学力が高い傾向にあるわけです。また逆に、教科学力が低い傾向は次の特種的なプロフィールをもっています。

- ・様々なメディアに頼っている。
- ・家族や友人、教師との良好な信頼関係が確立している。
- ・朝食の摂取を含め基本的な生活習慣が身に付いている。
- ・知的好奇心が豊かで、学習のおもしろさを感じている。
- ・学習の役立ちや大切さを積極的に認めている。
- ・物事をやり直した経験や喜びを味わっている。
- ・繰り返し練習するだけでなく、関連させて覚えている。
- ・学習の計画や約束をもっと取り進んでいる。
- ・家庭での学習時間を確保し、習慣をきちんとやっている。
- ・来校しないことはそのままにせず、分かるまでがんばっている。
- ・けじめをつけて、勉強に集中して取り組んでいる。
- ・学校の授業を大切にしている。

豊かな基礎体力

学びに向かう力

自ら学ぶ力

学びを促す力

「教科学力」と「学びの基礎力」が正の相関関係にあることを考えると、学校教育において、家庭教育においても、それらをバランスよく育んでいくことが重要であることが分かります。現在の高い教科学力をさらに高めていける「伸びしろ」を考えた場合、「豊かな教科学力」(例えば、単にテストの点が高いといった一面的な学力)で学力の高さを判断するのではなく、個々の子どもたちの「学びの基礎力」や「生きる力」の伸長こそ、学校や保護者は意識して取り組んでいかなければならないと考えます。

まず、学校教育では、次のような取り組みを継続強化していきます。

- 学校行事をはじめとした生徒の主体的な活動の展開
大卒時の1年生はスクアールが恒例的に続く。2年生が高スコアードで3年生の下がり具合も小さいことをふまえると、これまでの劇中の教育活動が生徒の主体的な活動や自己効力感、自己責任などの「学びに向かう力」を育んできたのではないかと考えます。
- 互いを認め合う活動(賞賛の拍手の奨励・終わりの会でスピーチなど)
友人同士の間柄関係を構築する一つの手段として考えます。「豊かな基礎体力」が高まることを期待しています。
- MTの実施
MTを実施したことによって、以下のような様子が見受けられました。
 - ・以前と比べて家庭学習の時間が増えた生徒(7.4%)
 - ・テレビを視聴する時間が減った生徒(5.1%)
 これらの結果から、MTの実施は、「自ら学ぶ力」を高めることにつながります。モジュール学習による授業の実施
モジュール学習を実施することによって、例えば、美術科では美術館へ出かけるといった学習の計画を、モジュール学習では「運動体験の機会」を増やします。
- 総合的な学習の時間
1年時には生徒個々の計画によって市内循環調査をしたり様々な運動活動を行いました。これら活動から「学びに向かう力」「自ら学ぶ力」を伸ばしてきています。

このように学校も、さまざまな取り組みを通して生徒の「学びの基礎力」や「生きる力」の伸長を図ろうとしています。そして、家庭でも、この点を踏まえて協力していた

だけると、よりの効果が期待できると考えます。この点について、講演会でほかのよりの関係者へ一般的なデータも示されました。

「知的好奇心が高い子どもの割合」

- ・家庭で知的好奇心を刺激するような話題をよくするか。 ○:する X:しない
- ・学校で知的好奇心を刺激するような話題をよくするか。 ○:する X:しない
- (家×学×、学×学×)の組み合わせで、「知的好奇心が高い生徒の割合」がどのくらいいるかのアンケートを作ったと以下のようになった。

1位(家○、学○) 約8.2%	家○学×という生徒の68%に「知的好奇心が高い」という結果です。学校での「知識」より、家庭での「知識」が重要であるということを示しています。
2位(家○、学×) 約6.6%	
3位(家×、学○) 約6.7%	
4位(家×、学×) 約4.5%	

この一時的なデータが示すように、家庭での経験は実に大きな影響を与えます。「勉強しなさい」という表面的な刺激ではない子どもへの働きかけのヒントが、このあたりにあるように思われます。

講演会では「家庭の教育力のモデル」として次のものが示されました。



別紙でこのモデルに基づいてつくられた「家庭の教育力に関するアンケートリスト」を別紙に示しました。ぜひ、セルフチェックをしていただきたいと思います。また、保護者のみなさんがそれぞれなまってるみてよいかもありません。用語にも記載のように、「○」だからダメ」とか、「○だから問題なし」といったチェックではありません。それぞれの家庭の教育的な働きかけの傾向や特徴を見つけていただくためのチェックシートです。すべての記載内容を確認され、有効にご活用いただければと思います。

2年生118人のすべての子どもたちは、自らの力を高めたいと本当に前向きに考えている子どもたちです。それは間違いありません。しかし、ある時は十分な成果がでないときがあるかもしれません。また、ある時はつい思いどおりの行動があるかもしれません。そのようなときに、子どもたちが動かしに足らぬ限り間違いに気付いたりできるのは、どのくらい「学びの基礎力」が高まっているかによるのです。

学校と保護者がともに協力し合い、「総合学力」向上にむけた取り組みを行っていただくと考えます。よろしくお願ひします。

<文責・金山 佐徳>

3 「PISA型読解力」向上の取り組み

1 実施の概要

前述した6つの教育活動のうち、PISA型読解力の向上を目指した取り組みが「国際学力向上プロジェクト」である。周知のとおり、PISA学力調査では、日本の高校生の「読解力」の低下が問題になっている。そこでは、「読解力」は「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する力」と定義されている。これは、いわゆる国語的な読む力というよりは、思考力や表現力との関連が深いと考えられる。このような力は今まで、各教科の学習の中で意識的に、或いは無意識のうちに定着が図られていたものである。この「読解力」をひとつの学力と捉えて具体的に定義し、意識して指導することで、より

効果的な定着と向上が図られると考えた。そこで、「国際学力向上プロジェクト」と題した取り組みを平成18年度、1・3年生の各学級を対象に、選択授業の時間の枠内で、以下のような形で実施した。

- 時間…週1時間 年間35時間
- 内容…文章やグラフなどの様々な資料の読解（資料の読み取り、資料の解釈、資料を基にした表現の力等を身に付ける）
- 担当…国語、社会、数学、理科、技術・家庭の教員が5時間ずつ交代で担当（下表参照）し、教科の学習の中で必要となる「読解力」を取り上げ（国語であれば、文章の読み取り、解釈、表現など、社会科や理科であれば、図やグラフの読み取り、解釈、予想など）、「読解力」の定着を図る。

【平成18年度後期の国際学力向上プロジェクト スケジュール】

期 日	10/12	10/19	10/27	11/2	11/9	11/16	11/23	11/30	12/7	12/14	12/21	1/11	1/18	1/25	2/1
時 数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
クラス															
3-1	国語① 佐藤	国語② 佐藤	国語③ 佐藤	国語④ 佐藤	国語⑤ 佐藤	社会① 倉澤	社会② 倉澤	社会③ 倉澤	社会④ 倉澤	社会⑤ 倉澤	国語① 中村	国語② 中村	国語③ 中村	国語④ 中村	国語⑤ 中村
3-2	国語① 中村	国語② 中村	国語③ 中村	国語④ 中村	国語⑤ 中村	国語① 佐藤	国語② 佐藤	国語③ 佐藤	国語④ 佐藤	国語⑤ 佐藤	社会① 倉澤	社会② 倉澤	社会③ 倉澤	社会④ 倉澤	社会⑤ 倉澤
3-3	社会① 倉澤	社会② 倉澤	社会③ 倉澤	社会④ 倉澤	社会⑤ 倉澤	国語① 中村	国語② 中村	国語③ 中村	国語④ 中村	国語⑤ 中村	国語① 佐藤	国語② 佐藤	国語③ 佐藤	国語④ 佐藤	国語⑤ 佐藤
1-1	理科① 山田	理科② 山田	理科③ 山田	理科④ 山田	理科⑤ 山田	技術① 池田	技術② 池田	技術③ 池田	技術④ 池田	技術⑤ 池田	数学① 渡部	数学② 渡部	数学③ 渡部	数学④ 渡部	数学⑤ 渡部
1-2	数学① 渡部	数学② 渡部	数学③ 渡部	数学④ 渡部	数学⑤ 渡部	理科① 山田	理科② 山田	理科③ 山田	理科④ 山田	理科⑤ 山田	技術① 池田	技術② 池田	技術③ 池田	技術④ 池田	技術⑤ 池田
1-3	技術① 池田	技術② 池田	技術③ 池田	技術④ 池田	技術⑤ 池田	数学① 渡部	数学② 渡部	数学③ 渡部	数学④ 渡部	数学⑤ 渡部	理科① 山田	理科② 山田	理科③ 山田	理科④ 山田	理科⑤ 山田

2 取り組みの実際

国際学力向上プロジェクトでは、ひとつのクラスに対し、6人の教師が5時間ずつ交代で、各教科の特性に応じて、「読解力」向上に向けた課題を準備し、授業を行っている。ここでは、3年生の社会科担当の授業を例に、説明する。

3年生の国際学力向上プロジェクトの社会科担当の授業では、左下のワークシートを使用して、グラフの情報の読み取り、解釈、熟考を行った。

まず、生徒に資料「日本のエビ輸入先」の1970年から1990年までを提示し、「このグラフから読み取れることを、5つあげなさい。」と指示した。生徒は、「台湾が1985年頃、数年で急激に増加し、すぐに減少している」「台湾の減少とともにタイ、インドネシアが急激に増加している」「輸入先は東南アジアの発展途上国だ」「エビは養殖されているので、急激に増加しているのは養殖を始めたからではないか」など、情報を読み取ったり、そこから予想を立てたりした。

【授業で使ったワークシート】

国際学力向上プロジェクト
グラフを読もう!その1

このグラフは、日本のエビ輸入先の数値を示しています。生徒はグラフを読み取り、以下の問いに答えてください。

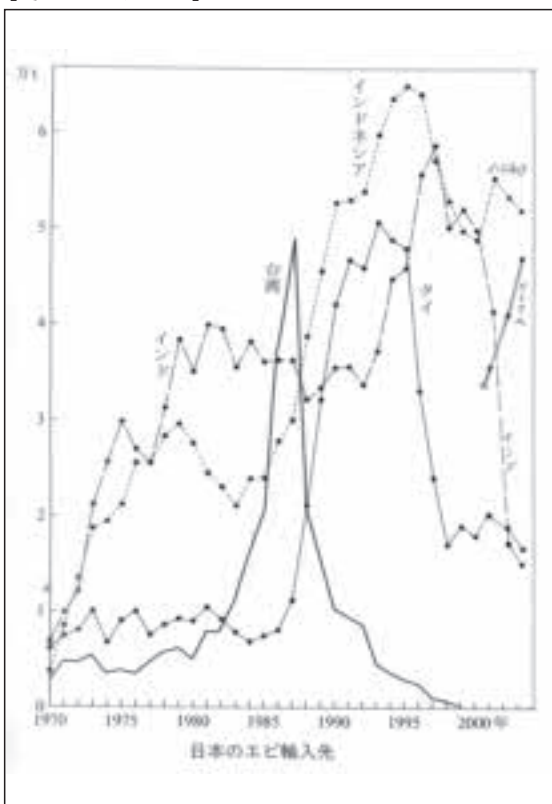
- このグラフから読み取れることを、5つあげなさい。
- このグラフから読み取れることを、5つあげなさい。

ワークシートには、グラフの読み取り、解釈、熟考を行うための問いが記載されています。

次に、生徒に「1990年以降のグラフを予想して書き入れなさい。また、そのようにした理由を説明しなさい」と指示した。生徒は、話し合いでわかってきたことを基に、様々にグラフを予想して、ワークシートに記述し、さらに互いの考えの根拠の妥当性を検討しあった。そして、教師は、正解のグラフ(右下【その後のグラフ】)を掲示した。生徒からは、驚きの声や、「やっぱり思った通りだ」との声が出た。

この後、補助資料も参考にして生徒は、東南アジアの国々は次々にマングローブを伐採してエビの養殖池を造って日本にエビを輸出していること、養殖池はエビの病気や環境破壊で数年で使えなくなること、日本は人件費の安い国を探して次々と輸入先を変えていること、などを読み取っていった。最後に感想として、ある生徒は「とても痛々しいグラフだ」と記述した。

【その後のグラフ】



このようにして、社会科担当の時間では、グラフや図を読み取り、そこから予想したり、解釈したりする活動を通して、PISA型読解力の向上を図った。

他にも、国語、数学、理科、技術・家庭科の担当教諭が、それぞれの教科の特性を生かして「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達さ

せ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する力」を高めるための授業を行った(下図、国語・数学・理科のワークシート参照)。これらの学習は、『学力向上のための基本調査2006(中間報告)』にある「読解力」向上への提言10か条の考え方とも一致するものである(特に10か条の③④⑥⑦)。

【国語ワークシート】

【数学ワークシート】

種類	40	50	60	700	800	1200	1500	1800	2100
寿命	60	90	120	150	180	210	240	270	300

【理科ワークシート】

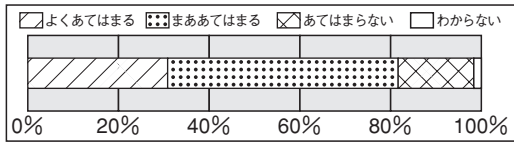
内容	特徴
内容①	内容①の内容
内容②	内容②の内容
内容③	内容③の内容

3 成果と課題

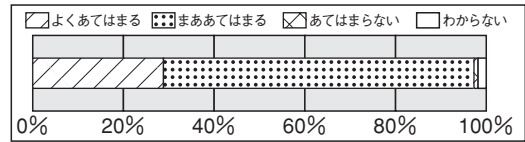
実施後の生徒へのアンケート結果は、以下のようであった。

生徒へのアンケート結果(H18)

①国際学力向上プロジェクトの学習に興味をもって取り組むことができた。



②文章や図、表、グラフなどの資料を読み、その資料の内容を理解したり、自分の考えを書いたりすることができた。



また、感想として、生徒は次のように記述した。

- 普段やらないような問題とかもたくさんできて、すごくおもしろかった。(1年男)
- この学習で、資料を読み取る力が上がったんじゃないかと思う。これからも積極的に取り組みたい。(1年男)
- 社会の読み取りが難しく、苦労したけど、だんだん自分に力がつくのを実感できて楽しかった。2学期はさらに頑張りたい。(1年男)
- 普段できないことを、この国際学力向上プロジェクトで学び、少し自分の考え方が変わったり、学ぶことがあったと思います。(1年女)
- 今まで私は、このような勉強をした事がなかったので、とても楽しかったです。また、「これができれば、国際人だ」と思うと、とてもやる気できました！(1年女)
- 国際学力向上プロジェクトでの学習が、普通の授業とどう違うのか、はじめは分からなかったけど、実際に学習してみて、国際学力向上プロジェクトも、私たちにとって必要な学習だなあと感じた。(3年女)

以上のように、生徒アンケートからは、多くの生徒が前向きに学習に取り組み、自分の「読解力」の高まりを感じていることがわかった。「読解力」向上について、数値的な成果はまだ測定していないが、今後、新潟大学と共同で、実際に過去(2000、2003年)に行われたPISA学力調査を活用して、生徒のPISA学力の測定及び分析を行っていく予定で

ある。

課題としては、教材の分析・精選・開発が必要であること、総合や各教科の学習との関連性を整理することが挙げられる。また、国際学力向上プロジェクトでつけた「読解力」を、発揮する場として、総合や各教科を位置付けることができるようにしていきたい。

4 総合学力(学びの基礎力・教科学力・社会的実践力)向上の取り組み

ここでは、①で述べた6つの教育活動のうち、特にモーニングテスト(以下MT)、モジュールス

ケジャーリング(以下MS)、共に学ぶ姿のある授業について説明する。

1 モーニングテスト(MT)

基礎的基本的な知識・技能の確かな定着と、家庭での学習習慣の確立を目指して行っているものがMTである。MTとは、国数英社理の5教科で、順番に毎朝1教科ずつ、7分間で行うテストである。年間135回行っている。

内容は国語が漢字、数学が計算、英語は英単語、社会・理科は基本的な用語で、授業での学習内容との関連をできるだけ図るようにしている。

従来のいわゆる朝学習と違う点は以下の点である。

- ①教科の学習内容と連動した自作テストである
- ②その日のうちに採点をして(担当者には採点のための空き時間を一時間確保してある)、生徒に帰りの会で返却する
- ③不合格(正答率85%以下)の生徒に対し翌日、再テストを実施する
- ④各教科とも、テスト返却時に次回のテスト内容を生徒に伝える
- ⑤生徒にMTノートを作成させ、予習をしたり、見直したりできるようにする
- ⑥MTの結果を、各教科の成績に反映させる

【国語のMT問題の一部(左)と予告(右)】

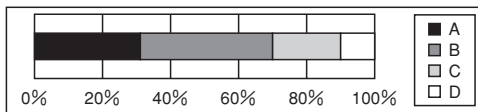


【MTに取り組む生徒】

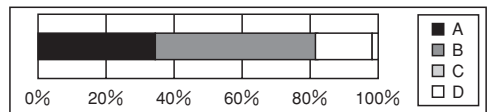


生徒へのアンケート結果(H17)

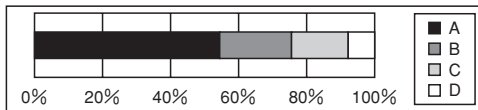
①MTにより家庭学習時間が増えた



②テレビ視聴時間が減った



③授業がわかりやすくなった



- A よくあてはまる B まああてはまる
C あてはまらない D わからない

実施後の生徒へのアンケート結果では、以下の成果が見られた。

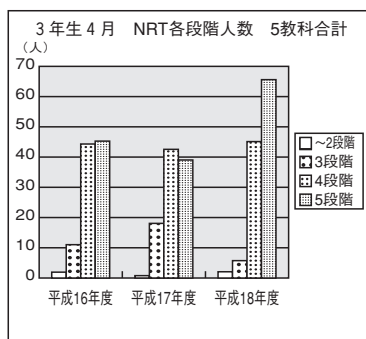
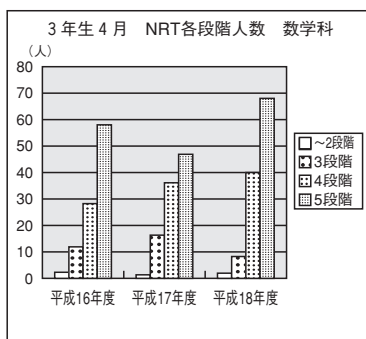
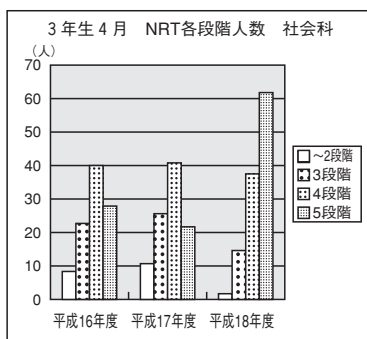
- ①生徒の家庭学習時間が増えたり、テレビ視聴時間が減ったりした
- ②生徒の授業内容に対する理解が深まった(基

礎・基本の定着が図られたことにより、授業での思考や問題解決に活用できたことによると考えられる)

そして、標準学力テストの結果(次頁)では、MTに1年間取り組んだ平成18年度の3年生が、例

年の3年生に比べ、3段階以下の生徒が減少し、5段階の生徒が増加したことがわかった。この結果

は、MTのためだけではないだろうが、MTの結果が表れているものであることは間違いのないであ



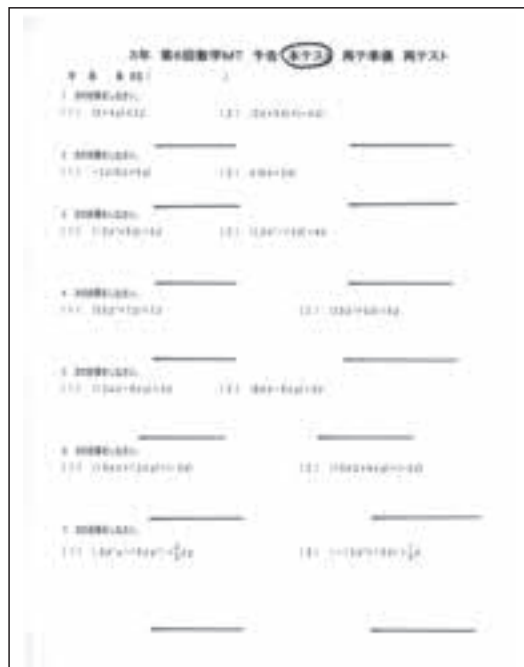
ろう。

さらに、教師サイドからは、個別支援の必要な生徒を早期に把握できること、授業では習得よりも探究に多くの時間を割くことができること、な

どのメリットがあった。

以上のことから、MTは、生徒の学力のうち、特に基礎的基本的な知識・技能の定着に有効であった。

【3年生MT問題 社会(左) 数学(右)】



2 モジュールスケジューリング (MS)

これは、平成17年に行った総合学力調査において、当校の「学びの基礎力」、特に「豊かな基礎体験」が低いという結果が出たことを基に始めた教育活動である。モジュールとは、生徒に、より主体的で体験的な学習を保障するため「教科担任が教室で50分授業をする」という一般的な授業形態の、時間・空間・スタッフを弾力的に変える試みである。これにより、より体験的・追究的な学習を可能にすることで、生徒に豊かな基礎体験を保

障し、学ぶ意欲や学ぶ意志、学ぶ力をさらに高めようとするものが当校のMSである。

具体的には、7月と12月にモジュール期間を設け、特別時間割を作成する。各教科では、必要に応じて自由に、時間(25分を1モジュールとして75分や100分など)、空間(教室を出て校内、校外で)、スタッフ(教員同士や外部の方とのTTなど)を設定し、学習を行う。

実際には、国語でルポルタージュを作成するた

め、校外に取材に出かける、社会科で地域の歴史を学習するために調査に出かける、裁判の傍聴を行う、美術で美術館に鑑賞に行く、家庭科で保育実習のため保育園を訪問する、などの学習活動を行った。

社会科で新潟地方裁判所へ裁判傍聴に行ったある生徒は「一生に一度あるかないかという、とても貴重な体験ができました。最後のほうは、本当に裁判官になったような気分を味わうことができ

ました。厳粛な所なのに楽しかったと言っはいいませんが、初めて見る法廷や傍聴で、より裁判について興味をもつことができました」と述べた。このように多くの生徒が、学習内容に対する興味・関心をもち、学ぶ意欲を高めていった。実施後の生徒へのアンケート結果では、以下の成果が見られた。

- ①日頃の授業ではできない体験ができた
- ②学習内容への興味や関心が高まった

【保育園での実習(家庭科)】

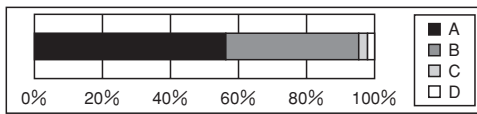


【ルポルタージュ作成の取材(国語)】

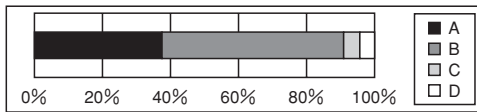


生徒へのアンケート結果(H17)

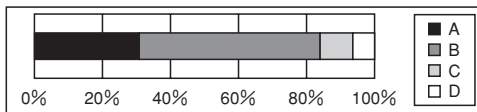
①日頃の授業ではできない体験ができた。



②日頃の授業ではできない追求ができた。



③学習への興味関心が高まった。



A よくあてはまる	B まああてはまる
C あてはまらない	D わからない

以上のことから、MSは、生徒の学ぶ意欲を高めることに有効であった。このような学習の積み

重ねが、生徒の「豊かな基礎体験」を高めることにつながると考える。

3 共に学ぶ姿のある授業

学校とは、自分とは違う個性をもった他者と共に学ぶ場である。そこで、授業において、主に言葉による「他者とのかわり」を重視することにした。なぜなら、他者は、自分とは異なる特徴(知識や技能、考え方や価値観)をもつ存在だからである。そのため、生徒が課題をもって、他者と考えを共有したり合意を形成したりしていく状況において、「問い掛ける」「説明する」「説得する」「確かめる」など、言葉を用いて生徒同士が、互いに

働き掛け合うことで、表現力や思考力、問題解決能力などが高まったり、学習内容への認識が深まったりして、知識や技能の確かな定着が図れると考えられるからである。そこで、平成16年から18年までの3年間、「共に学ぶ姿のある授業」を主題に掲げた実践研究を行った。

私たちの目指す「共に学ぶ姿のある授業」とは、次のような授業である。

生徒が互いの考えや実感の違いを自覚し、明確な問題意識をもって、
その根拠や理由を交流・検討することで、認識を深め、
知識・技能を確かに獲得する授業

このような授業を行う過程で、生徒に「課題発見能力、思考力、判断力、表現力、問題解決能力」

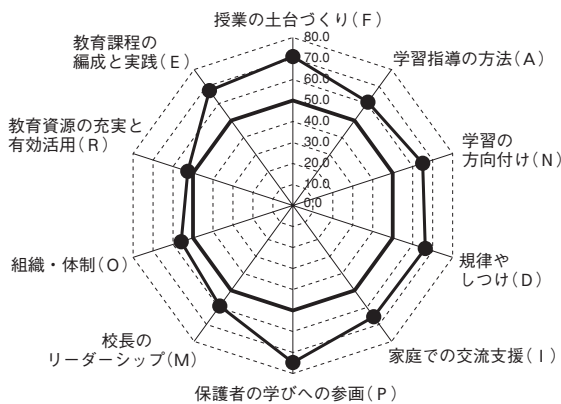
などの能力を育成し、学習内容への認識を深めさせ、知識・技能を獲得させた。

5 今後の展望

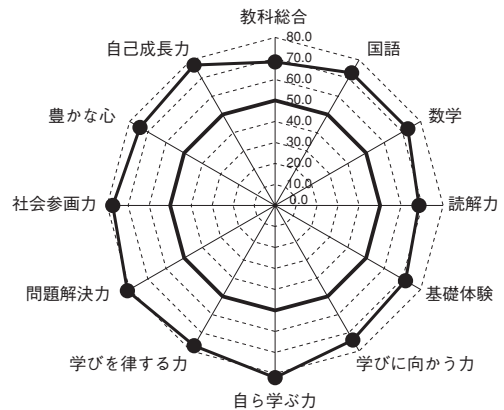
以上、述べてきたように、総合学力調査をはじめとして、様々な調査・アンケート等の結果を基に、目的に応じて様々な教育活動を行うことで、

生徒の総合学力の向上について、以下のように、一定の成果をあげることができた。

当校の総合教育力プロフィール



当校の総合学力プロフィール(2年)



ベネッセ教育研究開発センター「学力向上のための基本調査2006」より

2006年度の基本調査の結果からは、総合教育力について、さらに改善の余地があることが浮き彫りとなった。今後、上記の結果や、生徒の現状を基に、生徒・保護者・社会のニーズ、教育界の動向等、様々な要素に対応する教育活動を主体的に創り出し、実践していくことが求められていると考える。

《参考文献》

- 新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校研究紀要 2006 『共に学ぶ姿のある授業』
- 国立教育政策研究所 2004 『生きるための知識と技能 2—OECD生徒の学習到達度調査—』ぎょうせい
- ベネッセ教育研究開発センター 2006 『学力向上のための基本調査2006 中間報告』